

# 日本語の依頼表現に関する一考察 —「てもらっていいですか」を中心に—

## A study of Request Expressions in Japanese — Focusing on “temoratteiidesuka” —

文学研究科国際言語教育専攻修士課程修了

佐久川 利 奈

Rina Sakukawa

### (要約)

近年、「(エレベーターで)5階押してもらって(も)いいですか」のように、許可を求める形で依頼が行われることがある。本稿は、この〈許可要求〉系依頼表現がどのような依頼に使用されるのかを FTA の観点から検討したものである。筆者は、①FTA 度が低いため、聞き手による当該行為の遂行が予想される依頼、②FTA 度が高くても、話し手が当該行為を依頼する当然性が高い依頼の 2 つにおいて〈許可要求〉系依頼表現の使用が増えるという仮説を立てた。

この仮説を検証するため、日本語母語話者 119 名を対象にアンケート調査を実施している。結果、FTA 度が低い依頼では、聞き手による当該行為の遂行が確実だと言える場面で〈許可要求〉系依頼表現の使用が増えることが分かった。一方、FTA 度が高い依頼では、聞き手が年下・同世代で話し手が当該行為の遂行を依頼する当然性が高い場合において、〈許可要求〉系依頼表現の使用が多く見られた。

### I. はじめに

近年、よく耳にするようになったと言われているのが「写真を撮ってもらって(も)いいですか<sup>1</sup>」のような〈許可要求〉系依頼表現である<sup>2</sup>。これは聞き手に許可を求める「てもいいですか」に「てもらおう」が加わることで依頼表現として機能している。また、聞き手に諾否の権限を委ねる形になっていることが、フェイス侵害行為(以下、FTA)に対する配慮になっている<sup>3</sup>。

日本語には、様々な依頼表現が存在するが、FTA 度が高い依頼に対しては間接的な表現が使用され

<sup>1</sup> 「写真を撮ってもらっていいですか」「撮ってもらってもいいですか」の 2 通りの言い方があるが、両者に機能的な違いはないと思われるので、本稿では代表的な形として「てもらっていいですか」を扱う。

<sup>2</sup> 山岡ほか(2010)は「写真を撮ってもらっていいですか」のような依頼表現を〈許可要求〉系依頼表現と呼んでいる。

<sup>3</sup> Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論。

る傾向がある(岡本 2000, 戸嶋・皆川 2008)。中上級学習者を対象にした日本語の教科書にも、相手が目上または疎遠な場合、そして依頼が相手にかける負担が大きい場合には、間接的な依頼表現を使用したほうがいいとの記述が見られる(清水 2013)。

〈許可要求〉系依頼表現は、許可を求める形で依頼をすることから、間接性が高い表現の1つと言えるだろう。この表現の使用については、その回りくどさから否定的な意見も見られる(砂川 2006)。しかし、近年の急速な使用の広がりを考えれば、いずれは日本語母語話者だけでなく、日本語学習者が使用するようになることも想像に難くない。

〈許可要求〉系依頼表現の使用の広がりが指摘される一方で、この表現がどのような依頼に対して使用されるかといった詳細は明らかにされていない。そこで、本稿では、以下の2点を研究目的とする。

- i. FTA度を中心的要因に、〈許可要求〉系依頼表現が使用される条件を明らかにする<sup>4</sup>。
- ii. 日本語教育における〈許可要求〉系依頼表現の適切な導入場面を提案する。

## 1. 本稿における依頼表現の分類

依頼表現には様々なバリエーションが存在し、その分類方法も研究者によって異なる。本稿では、山岡ほか(2010)の分類方法を援用する。

山岡ほか(2010)は、山岡(2008)で挙げた依頼として機能しうる文機能<sup>5</sup>をもとに、日本語依頼表現を以下のような5つの系に分類している。

- I 〈遂行〉系依頼表現 … (お先に失礼しますので)後を頼みます。
- II 〈命令〉系依頼表現 … (子が母に)ねえママ、ドレミファを教えて。
- III 〈要求〉系依頼表現
  - 〈意志要求〉系依頼表現 … 「複雑で分かりにくいから黒板に書いてくれませんか」
  - 〈可能要求〉系依頼表現 … 「申しわけありませんが眼鏡をはずしていただけますか?」
  - 〈許可要求〉系依頼表現 … アンケートに答えてもらってもいい?
- IV 〈願望表出〉系依頼表現 … 「隣の部屋を取っていただきたいんですが」
- V 〈情意表出〉系依頼表現 … もう少し安くしていただけたらうれしいんですけど。

## II. 先行研究

本稿の目的に関連するものとして、B&L(1987)のポライトネス理論と〈許可要求〉系依頼表現に関する諸研究(砂川 2006, 蒲谷 2007)、加えて〈許可要求〉系依頼表現を扱っている日本語の教科書を取り上げる。

<sup>4</sup> 「FTA度を中心的要因に」としたのは、話し手が当該行為を依頼する当然性など、他の要因から〈許可要求〉系依頼表現の使用場面を考察したためである。

<sup>5</sup> 山岡(2008)は、「述語形式」「主語の人称」「時制辞」などの要素によって規定される文形式の機能を「文機能」と呼んでいる。

## 1.B&L(1987)のポライトネス理論

B&L(1987)はポライトネスをフェイス保持の戦略として捉えている。フェイスとは、人間なら誰もが持つ人間関係に関わる基本的欲求のことである。フェイスには「positive face (ポジティブフェイス)」「negative face (ネガティブフェイス)」の2種類がある。前者は他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいというプラス方向の欲求であり、後者は自分の領域を他者に邪魔されたくない、立ち入れたくないというマイナス方向の欲求である。たとえば、話し手が依頼を行って、聞き手がそれに応じた場合、これは聞き手のネガティブフェイスを侵害したことになる。このように、相手のフェイスを脅かす可能性がある行為を、B&LはFTAと呼んだ。

依頼だけでなく、人と人のコミュニケーションには、FTAとなる危険性がたくさんある。B&LはFTAに配慮した言語行動を「ポライトネス」と呼び、FTAの度合いに応じて適切なポライトネスを選択する基準体系を「ポライトネス戦略」と名付けた。また、FTAの度合いを左右する要因として、話し手と聞き手の親疎関係(D要因)と上下関係(P要因)、そして、特定の文化で行為xが相手にかける負荷度(R要因)の3つを挙げている。

## 2.砂川(2006)

砂川(2006)は、〈許可要求〉系依頼表現が特に若者の間で使用されるようになってきた表現だと指摘し、この表現が用いられる理由として「てもらう」を使用することで、話し手が受ける利益恩恵を表せることを挙げている。

しかし、「てもらう」を用いた依頼表現としては、すでに「てもらえますか」が存在する。それにも関わらず、〈許可要求〉系依頼表現が使用されるのは、「てもらえますか」が依頼表現として定着したためだと述べている。聞き手に何かを依頼する際、依頼表現として定着した表現を使用すれば、それは直接的な働きかけとなり、聞き手のフェイスを侵害することに繋がる。それを回避するために、若者は許諾の可否を尋ねる表現を用いて、依頼の押しつけがましさを軽減しようとしているのではないかと砂川は分析している。

このように〈許可要求〉系依頼表現が使用される理由を分析しながらも、砂川は以下のような依頼場面を挙げて、〈許可要求〉系依頼表現の使用について否定的な意見を述べている。

(観光客が通りすがりの人に) すみませんがシャッター押してもらっていいですか。

(エレベーターに乗り合わせた乗客に) 3階のボタン押してもらっていいですか。

(砂川 2006:311 下線は筆者による)

「シャッターを押してもらう」「エレベーターのボタンを押してもらう」という行為は、負担の軽い作業であり、依頼された場合は引き受けるのが当たり前である。そのため、このような場面で〈許可

要求〉系依頼表現を使用すると、かえって聞き手に押しつけがましさを与えてしまうことになる」と砂川は指摘している。そして、その押しつけがましさは「ていただいちゃよろしいですか」と敬体に直しても変わらないとも述べている。

若者は丁寧に依頼を行うために「てもらえますか」の代わりとして「もらっていいですか」を使用しているのだろうが、それならば、敬体の「てくださいますか」や「ていただけませんか」を使用したほうがいいと砂川は述べている<sup>6</sup>。

### 3. 蒲谷(2007)

蒲谷(2007)は、依頼の場面で用いられる「もらって(も)いいですか」を「許可求め型表現」と呼び、それが使用される理由を「行動展開表現」における「丁寧さ」の原理に基づいた表現上の工夫だと述べている。

話し手が聞き手に何らかの発話を行う場合、話し手には発話の目的が存在する。蒲谷はこれを「表現意図」と名付け、依頼のように聞き手の何らかの行動が伴うことによって、「表現意図」が実現されるものを「行動展開表現」と呼んだ。

「表現意図(X)」には「典型的な表現(X)」が存在する。しかし、「行動展開表現」の場合は、場や人間関係に配慮して丁寧に表現しようという話し手の心理が働き、表現が「典型的な表現(X)」から変わることがあると指摘している。これを「丁寧さ」の原理として、川口ほか(2002)は以下のように規定している。

「行動」するのは「自分」であり、その「行動」をしてもよいかどうかを決める力を持っているのは「相手」、そしてその「行動」によって「利益や恩恵」を受けてありがたいのは「自分」である、という認識を表すことが最も「丁寧さ」を表すことである<sup>7</sup>。逆に「行動」を「相手」にさせ、その「行動」をしてもよいかどうかを決める力を持っているのは「自分」、そしてその「行動」によって「利益や恩恵」を受けてありがたいのは「相手」である、という認識を表すことが「丁寧さ」を表さないことである。

(川口ほか 2002:24)

依頼は話し手の利益となる行為の実行を聞き手に要求するものであるが、当該行為を実行するかどうかの選択権は聞き手が持つものである。したがって、依頼は「行動」＝「相手」、「決定権」＝「相手」、「利益・恩恵」＝「自分」という構造を持つ表現ということになる。この「相手」に「行動」をさせるという構造になっていることが「丁寧さ」の点で問題になると蒲谷は指摘している。

一方、許可要求は、話し手自身が行う行為について実行してもよいかを聞き手に尋ねるものである。したがって、「行動」＝「自分」、「決定権」＝「相手」、「利益・恩恵」＝「自分」という構造となり、「丁寧さ」の原理においては最も丁寧な表現であると言える。そのため、依頼の場面で「もらって(も)いいですか」が使用されるのは、話し手が「丁寧さ」の原理に基づいて、依頼を丁寧に表現しようとしているためだとしている。

蒲谷(2007)は、「行動展開表現」における丁寧さの観点から〈許可要求〉系依頼表現が使用される理

<sup>6</sup> 若者が「ていただけませんか」ではなく、「もらっていいですか」を使用するようになった理由には、聞き手に親しさを表しながら依頼をしたいという心理もあるのだろうと、砂川は指摘している。

<sup>7</sup> 蒲谷(2007)では「『行動』＝『自分』、『決定権』＝『相手』、『利益・恩恵』＝『自分』」と表記されている。

由を分析したものであり、FTA とは関連付けられていない。しかし、聞き手に何らかの行為の実行を要求する場合、人間関係や場に配慮して典型的な表現が使用されないことがあるというのは、人が FTA の度合いに応じて適切な表現を選択していると見なすことができるだろう。

一方、砂川(2006)は〈許可要求〉系依頼表現の使用が、依頼のフェイス侵害に対する配慮からくるものだとしている。しかし、「エレベーターの階数ボタンを押してもらう」「カメラのシャッターを押してもらう」といった FTA の度合いが低い依頼(聞き手が引き受けるのが当然と思われる依頼)に〈許可要求〉系依頼表現を使用するのは好まれない恐れがあると指摘している。これは、依頼を断る自由がかなり制限されている聞き手に、諾否権を明示的に示すのはマイナスポライトネス(宇佐美 2001)になるということだろう<sup>8</sup>。

砂川(2006)と蒲谷(2007)は〈許可要求〉系依頼表現の使用が聞き手に対する配慮からきているという点で一致していると言えるだろう。しかし、具体的にどのような依頼に対して〈許可要求〉系依頼表現が使用されるのかに関しては明らかにされていない。

#### 4.清水(2013)

清水(2013)は、〈許可要求〉系依頼表現を丁寧な依頼表現の 1 つとして扱っている。同教科書は、日本語がある程度話せる中上級学習者であっても、場面や相手の気持ちに配慮しながら適切な言い方を選んで話すことは難しいものであると指摘し、「相手との良好な関係を確立・維持しながら、自分の意図や考えをきちんと伝えることができる能力」の養成を目的に作成されたものである。

同教科書では、依頼するときの基本フレーズとして次の表現が導入されている。

目上の人や親しくない人に 依頼するときの基本フレーズ	対等・目下で親しい人に 依頼するときの基本フレーズ
<div> <div>間接的</div> <div>↑</div> <div>「～てもらうことはできますか」</div> <div>「～てもらってもいいですか」</div> <div>「～てもらえますか」</div> <div>↓</div> <div>直接的</div> <div>「～てもらいたいです」</div> </div>	<div> <div>間接的</div> <div>↑</div> <div>「～(ら)れる？」</div> <div>「～てもらって(も)いい？」</div> <div>「～てもらえる？」</div> <div>「～てくれる？」</div> <div>↓</div> <div>直接的</div> <div>「～てほしいんだけど」</div> <div>「～て(ちょうだい)」</div> </div>

<sup>8</sup> 宇佐美(2001)は、ポライトネスを談話レベルから捉えるディスコースポライトネス(DP)論を提唱している。そのなかで B&L のフェイス保持のためのポライトネスを「有標ポライトネス」と呼び、この有標ポライトネスは、不愉快な言語行動(マイナスポライトネス)になる場合があることを指摘している。

依頼をする際は、相手との関係や相手にかかる負担の大きさに配慮しなければならないとし、具体的に(1)相手と上下の差が大きい場合 (2)相手と疎遠な場合、また、(3)相手に依頼を引き受けてもらえる可能性が低い場合や (4)相手にかかる負担が大きい場合は、間接的な依頼表現を使用するように述べている。上記の通り、〈許可要求〉系依頼表現は、2番目に間接性が高い表現として挙げられており、2つの依頼場面で用いられている。

#### 会話2

**状況：**ナタリーはマンションの管理組合の役員をしています。年配の住人、和田のうちを訪ねます。

**ナタリー：**すみません、17日に消防の点検が入るので、それまでにベランダの荷物を片付けておいてもらってもいいですか。

**和田：**ああ、わかりました。連絡ご苦労さまですねえ。

#### 会話4

**状況：**オワナはアルバイト先の後輩のみきに話しかけました。

**オワナ：**みきちゃん、ちょっとお願いがあるんだけど…。

**みき：**なんですか。

**オワナ：**あした、急に就活で面接が入っちゃったから、シフトかわってもらってもいい？

**みき：**えっ、あしたはちょっと…。

(清水 2013:20-22 下線は筆者による)

### Ⅲ. 〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすくなる条件

#### 1. 筆者による清水(2013)の分析

清水(2013)は、(1)相手と上下の差が大きい場合や(2)相手と疎遠な場合、(3)相手に依頼を引き受けてもらえる可能性が低い場合、(4)相手にかかる負担が大きい場合には間接的な依頼表現を使用したほうがよいと述べ、その1つとして〈許可要求〉系依頼表現を挙げている。

しかし、Ⅱ章4節で挙げた会話2と会話4が、どの条件に当てはまるのかは明記されていない。そこで、同教科書で説明されている会話の状況や使用されている〈許可要求〉系依頼表現の形式から、それぞれが満たす条件を表1のように考えた。

(表 1)

	(1)上下関係	(2)親疎関係	(3)引き受けてもらえる可能性	(4)負担の大きさ
会話 2	話者 < 聴者	やや親しい	高い	大きい
会話 4	話者 > 聴者	親しい	低い	非常に大きい

会話 4 で〈許可要求〉系依頼表現が使用されている理由として、「アルバイトのシフトを代わってもらう」という依頼内容は負荷度が非常に大きいこと、相手に引き受けてもらえる可能性が低いことの 2 点があると推測される。

一方、会話 2 では相手が年配であることと、「ベランダの荷物を片付ける」という依頼内容の負荷度が大きいことの 2 点が、〈許可要求〉系依頼表現が用いられている理由だろう。相手が自分よりも年上で、依頼内容の負荷度が大きい場合は FTA 度が高くなる。そのため、依頼を引き受けてもらえる可能性は低くなることが予想される。それにも関わらず、会話 2 の引き受けてもらえる可能性を高いと判断したのは、会話 2 の状況が「消防の点検が入る」というものだったためである。このような状況で、和田がナタリーの依頼を断ることはあり得ないのではないだろうか。

この 4 つの条件から、清水(2013)が〈許可要求〉系依頼表現を FTA 度が高い依頼に対して使用するものだと認識していることが推測される。なぜなら、4 つの条件のうち、親疎関係・上下関係・依頼内容の負荷度は、B&L(1987)の 3 要因(D, P, R)に置き換えることができるためである。たとえば、自分よりも地位が上(P)で疎遠な相手(D)に、依頼内容の負荷度が大きい依頼(R)を要求する場合の FTA 度は非常に高くなる。したがって、清水が挙げた 3 つの条件から〈許可要求〉系依頼表現は FTA 度が高い依頼に対して用いる表現の 1 つとして扱っていることが分かる。

なお、(3)相手に依頼を引き受けてもらえる可能性については、依頼の FTA 度だけでなく、話し手が依頼を行うことが当然であるかどうかという点も影響すると考えられる。本稿では、話し手が依頼を行うことが当然である状況を「当然性が高い」、当然ではない状況を「当然性が低い」と表記する<sup>9</sup>。

## 2. 〈許可要求〉系依頼表現の実例と清水(2013)の比較

〈許可要求〉系依頼表現の使用は、依頼の FTA に対する配慮からきていると捉えることができる。しかし、この表現が具体的にどのような依頼に対して用いられるのかについては明らかにされていない。そのため、清水(2013)の例が〈許可要求〉系依頼表現の使用例として適切かどうかを確かめることはできない。

<sup>9</sup> 「当然性」については、宇佐美が提唱する DP 理論において R 要因の下位要因として位置づけられている(宇佐美 2008:10)。また、川口ほか(2002)では、話し手が認識する依頼内容が実現され得る必然性を「当然性」と呼んでいる。

そこで、〈許可要求〉系依頼表現の実例と清水(2013)の例を比較することにする。以下はバラエティ番組と Twitter から収集したものである。

① A(後輩)が B(先輩)にお金を貸してもらえるように願います。2 人はお笑い芸人であり、何度も同じライブで共演している。

A：一瞬だけ 120 円だけ貸してもらっていいですか？

B：奢るよ！

(2019 年 7 月 8 日 Twitter でのやりとり)

② 芸能人 C が D に部屋の温度を下げてもらえるように願います。D は家の住人。

C：(汗をふきながら)ちょっと…。エアコン下げてもらっていいですか？

D：(笑いながら)はい。

(2019 年 11 月 5 日 日本テレビ『火曜サプライズ』)

③ E(お笑い芸人)は F(女優)と一緒に撮った写真をブログに載せたいと考えている。そこで、収録の休憩時間に F にブログの内容に問題があるかどうかを確認している。

E：文章のチェックしてもらってもいいですか？

F：あ、分かりました。

(2019 年 2 月 11 日 日本テレビ『行列のできる法律相談所』)

④ G が Twitter 上で好きなアイドルについて述べている。H も同じアイドルが好きだが、そのアイドルについて分からないことがあったので、G に教えてもらおう。

H：ff 外<sup>10</sup> から失礼します。(中略)今日〇〇からお知らせは来ましたか？ 本当に申し訳ありませんが教えていただいてよろしいですか？

G：今日は来ていませんよ！

(2019 年 12 月 14 日 Twitter でのやり取り)

⑤ I はあるイベントに当選したが、チケットが 1 枚余ってしまった。誰かに譲りたいが、同じ芸能人が好きな友人が身近にいないため、情報の拡散を J に依頼する。I と J は Twitter を通じて知り合った。

---

<sup>10</sup> Twitter 上で G と H が友人関係になっていないことを表している。



I: どうしても、〇〇(芸能人の名前)のファンの子に譲ってあげたいので、もしよろしければ拡散手  
伝っていただいても、よろしいですか? ファンの友達が全然いなくて…

J: ツイートして呼びかけてみます! あたしの友達で他に行きたい人いるかもなんで!

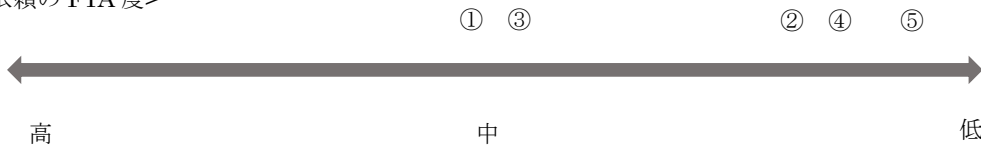
(2013 年 7 月 18 日 Twitter でのやり取り)

筆者の主観ではあるが、①～⑤の依頼者(話し手)と被依頼者(聞き手)の親疎関係と地位関係、依頼内容が聞き手にかける負荷度を考え、それぞれの FTA 度を次のように推測した。

①	②	③
親疎関係: 親しい	親疎関係: 親しくない	親疎関係: やや親しい
地位関係: 聞き手 > 話し手	地位関係: 話し手 = 聞き手	地位関係: 聞き手 > 話し手
行為の負荷度: 中程度	行為の負荷度: 小さい	行為の負荷度: 小さい

④	⑤
親疎関係: 親しくない	親疎関係: 親しくない
地位関係: 話し手 = 聞き手	地位関係: 話し手 = 聞き手
行為の負荷度: 小さい	行為の負荷度: 小さい

<依頼の FTA 度>



「お金を借りる」という行為が聞き手にかける負担は大きいものである。ただし、①は 120 円という金額であるため、行為の負荷度は中程度とした。人間関係の面では、B(聞き手)が先輩であるため、上下関係が発生する。しかし、A と B は何度も共演しており親しい関係であると推測できる。結果、FTA 度は中程度になると推測される。

それに対して、②は C と D が初対面であるため親しい間柄ではないが、依頼内容がエアコンのスイッチを押すだけの簡単な行為であることから、FTA 度は低くなると考えられる。

③に関しては、E(話し手)がお笑い芸人、そして F(聞き手)が女優であるため、聞き手の地位が高くなると判断した。しかし、E と F は一緒に写真を撮るぐらいの関係であること、また、E が書いた文章(「ブログに載せる文章」という発言から、長文だとは考えにくい)を読むだけであることの 2 点から、FTA 度は①と同程度と判断した。

一方、④⑤はH(話し手)の「ff外から失礼します」という発言や、どちらも会話を敬体で進めていることから、話し手と聞き手の関係はそれほど親しくないと考えられる。しかし、「アイドルからのお知らせの有無を答える」「Twitterで情報を拡散する」という依頼内容の負荷度の小ささから、②と同様にFTA度は低いと判断した。

以上の内容は、清水(2013)が扱う例と必ずしも一致しない。Ⅲ章1節で述べた通り、清水(2013)の例では、〈許可要求〉系依頼表現はFTA度が高い依頼に対して使用されるものだと見なすことができる。しかし、事例①～⑤のFTA度は中～低と考えられ、FTA度が高い依頼は存在しない。表2は、清水が挙げた〈許可要求〉系依頼表現を使用したほうがよい4つの条件と、事例①～⑤を比較したものである。

(表2)

(1)相手の地位が上である	① ③
(2)相手と疎遠である	② ④ ⑤
(3)断られる可能性が高い	該当する事例無し
(4)相手にかかる負担が大きい	① <sup>11</sup>

(1)(2)(4)については、その条件を満たす事例が存在するが、(3)聞き手に断られる可能性が高いという条件を満たす事例はない。なぜなら、②④⑤はFTA度が低いため、聞き手が当該行為の実行を断るとは考えにくいからである。

①③に関しては、FTA度が中程度とやや高くなるため、②④⑤と比べると聞き手に断られる可能性も上がる。しかし、Ⅲ章1節で筆者が挙げた「話し手が当該行為を依頼する当然性」という面から考えると、③については「既にEとFは一緒に写真を撮っている」という状況から、EがFに「文章のチェックをしてほしい」と頼むのは当然だと判断できる。よって、③も聞き手に依頼を断られる可能性は低くなる。

③に対して、①の当然性については、AとBのやり取りだけで判断をすることは困難である<sup>12</sup>。そこで、①は話し手と聞き手の人間関係に注目した。AとBはどちらもお笑い芸人であり、これまで何度も一緒に仕事をしてきた親しい間柄である。もし、それほど大金ではない120円を貸さなければ、今後のAとBの関係に軋轢が生じる恐れがある。軋轢が生まれれば、今後AとBと一緒に仕事をする際に支障がでることが容易に想像できるため、Bが「120円を貸してほしい」という依頼を断ると

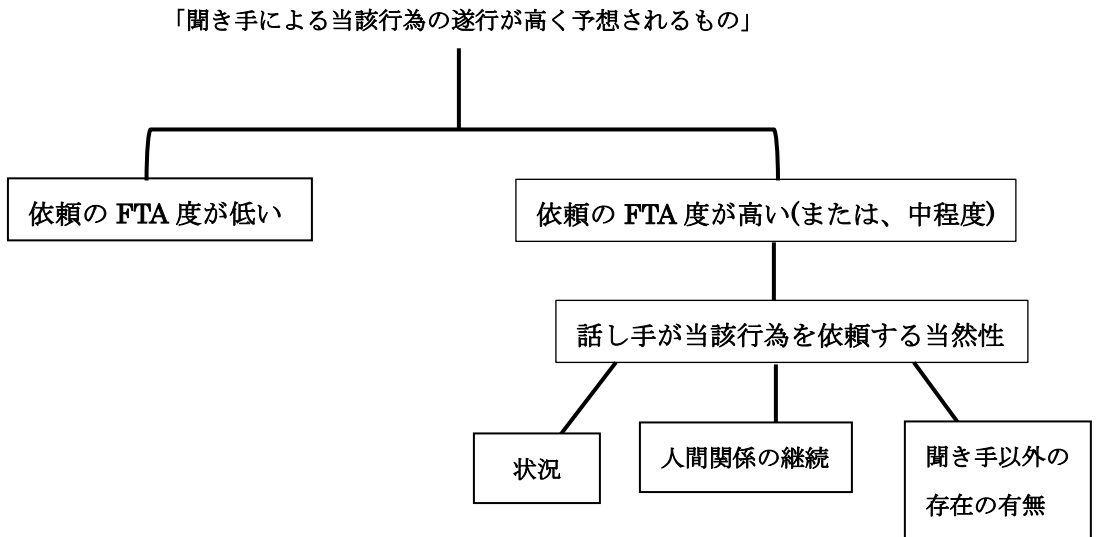
<sup>11</sup> 行為の負荷度は中程度と判断したが、他の事例と比較すると行為の負荷度が高くなっているため、相手にかかる負担は大きいとした。

<sup>12</sup> たとえば、①において「Aが家に財布を忘れて、食べ物や飲み物が買えない」「知り合いがBしかいない」という状況であれば、当然性が高くなると考えられる。

は考えにくい。以上の理由から、事例①～⑤の全てが(3)の条件を満たさないと判断する。

事例で共通していることは「聞き手に依頼を断られる可能性が低い」ということではないだろうか。FTA 度が低い依頼は、聞き手に断られる可能性が低いだろう。しかし、聞き手に依頼を断られる可能性を左右する要因は FTA 度だけではない。事例①と③は②④⑤と比べて、FTA 度がやや高くなる。だが、事例①は話し手と聞き手が親しい間柄であり、これからも付き合いが続く関係であることから、聞き手に依頼を断られる可能性は低くなるだろう。一方、事例③については、話し手と聞き手が「一緒に写真を撮っている」という状況から、聞き手が「文章をチェックする」という行為を遂行する可能性は高い。つまり、FTA 度がやや高くなる依頼のなかにも、聞き手に断られる可能性が低いものがあると考えられる。

(図 1) 〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすくなる依頼



以上のことから、筆者は〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすくなる依頼として「聞き手による当該行為の遂行が高く予想されるもの」を挙げる。さらにこれを「FTA 度が低い依頼」と「FTA 度が高くても、話し手が当該行為を依頼する当然性が高い依頼」の 2 つに分ける。また、後者の当然性を左右する要因として「状況」「話し手と聞き手の人間関係の継続」、さらに「聞き手以外に依頼できる人の有無」の 3 つを挙げる(図 1)。

「聞き手以外に依頼できる人の有無」という要因を挙げたのは、たとえば事例①において、A と B がそれほど親しくなくても、その場に B 以外の人がいなければ、A には「お金を貸してくれるだろう」という期待が生まれると考えたためである。

(表3)

依頼の FTA 度が低い		実例②, ④, ⑤
依頼の FTA 度が 高い	状況による当然性	実例③, 清水(2013)の会話 2
	人間関係による当然性	実例①
	他に依頼できる人がいない	

筆者の仮説をもとに、実例①～⑤と清水(2013)の例を分類したものが表3である。清水の会話2は、「消防の点検が入る」という状況から「ベランダの荷物を片付けてほしい」と依頼をする当然性が高くなる。そのため、FTA 度が高くても〈許可要求〉系依頼表現の使用場面として適切であると考えられる。

それに対して、会話4はオワナ(話し手)に就活の面接が入ったからといって、みき(聞き手)がシフトを代わることが当然であるとは言えない。したがって、清水に記載されている状況では、会話4は〈許可要求〉系依頼表現の適切な使用場面とは言えないのではないだろうか。

#### IV. アンケート調査

III章2節で見た通り、筆者は〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすくなる依頼を「聞き手による当該行為の遂行が高く予想されるもの」とし、それを「FTA 度が低い依頼」と「FTA 度が高くても、話し手が当該行為を依頼する当然性が高い依頼」に分けた。加えて、当然性を左右する要因として「状況」、「話し手と聞き手の人間関係の継続」、「聞き手以外に依頼できる人の有無」の3つを挙げた。

本章では、上記の仮説を検証するために実施したアンケート調査を簡単に整理する。

##### 1. 調査方法

**調査協力者：**20代～60代の日本語母語話者119名。協力者の内訳は、20代が67名(56%)、30代が12名(10%)、40代が10名(8%)、50代が20名(16%)、60代が10名(8%)である。

**調査実施期間：**2019年11月1日～2019年11月30日

**場面設定：**9つの場面(FTA 度が低い依頼が4場面、FTA 度が高い場面が5場面)を設定した。また、それぞれの場面で同世代・年下・年上の3人の聞き手を用意している。それぞれの場面を簡潔に示すと以下のようになる。

<FTA 度が低い依頼 4 場面>：聞き手は知らない人<sup>13</sup>

設問 1：エレベーターで階数ボタンを押してもらう

設問 2：観光地で写真を撮ってもらう

設問 3：通りすがりの人に写真を撮ってもらう

設問 4：バスで隣に座っている人に窓を開けてもらう

<FTA 度が高い依頼 5 場面>：話し手と聞き手は友人関係

設問 5：お金を貸してもらう

設問 6：引越し作業を手伝ってもらう

設問 7：書類の翻訳を手伝ってもらう

設問 8：会おうと約束していた日時を変更してもらう

設問 9：アルバイトのシフトを代わってもらう

**調査手続き：**①〈許可要求〉系依頼表現、②〈可能要求〉系依頼表現、③〈意志要求〉系依頼表現、④その他 の 4 つの選択肢を用意し、それぞれの場面で調査協力者が普段使用する表現を 1 つ選択してもらう形式である。なお、聞き手が年上の場合の選択肢は敬体を設定している。

(設問 1 同世代・年下の場合) ① すみません、5 階を押してもらっていいですか？

(設問 1 年上の場合) ① すみません、5 階を押していただいてよろしいですか？

**依頼表現の分類：**上記の選択肢の例から分かるように、すべての選択肢には前置き表現が表記されている。調査協力者の中には、選択肢にある依頼表現を使用しているが、表記されている前置き表現が異なるため「その他」として別の回答を記述する者もいた。

しかし、本稿は前置き表現の違いに焦点を当てたものではない。そのため、たとえば設問 1 の同世代の聞き手に対して「申し訳ありませんが、5 階を押してもらっていいですか。」という回答があった場合、〈許可要求〉系依頼表現として分類している。

## 2. アンケート結果(設問 1～4:FTA 度が低い依頼)

設問 1～4 は、依頼内容の負荷度(R)が小さいものである。ただし、表 4 の通り個々の状況は異なっている。

B&L(1987)では、「状況による当然性」「聞き手以外の存在の有無」「人間関係の継続」は FTA 度を

<sup>13</sup> 依頼内容の負荷度(R 要因)が小さい依頼を親しい聞き手にする場合は、FTA 度がかなり低くなり、〈許可要求〉系依頼表現の使用率が上がることが予想できたため。

決める要因として挙げられてはいない。しかし、アンケート調査から、3つの要因が依頼表現の選択に影響を与えていることが分かった(表5)。全回答の中で〈許可要求〉系依頼表現の割合が最も高いものには、数値を網掛けにして表示している。

(表4)

	依頼内容の負荷度	状況による 当然性	聞き手以外の 存在の有無	人間関係の 継続
設問1	小さい	高い	無し	無し
設問2	小さい	やや高い	有り <sup>14</sup>	無し
設問3	小さい	低い	有り	無し
設問4	小さい	低い	無し	無し

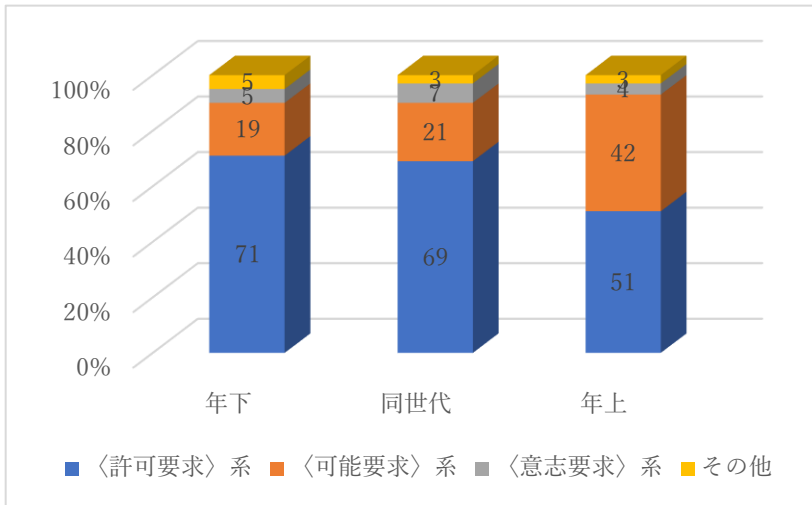
(表5) 〈許可要求〉系依頼表現の選択率

	年下	同世代	年上
設問1	71%	69%	51%
設問2	58%	59%	38%
設問3	56%	54%	40%
設問4	60%	76%	39%

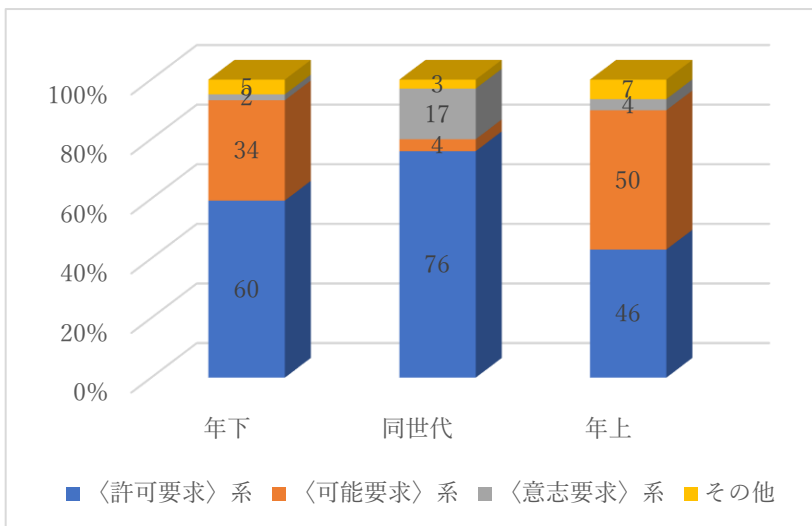
<sup>14</sup> 観光地や駅前などの普通の道には複数の人がいることが予想されるので、設問2と設問3はどちらも、聞き手以外に当該行為を依頼できる相手が存在する。

図 2、図 3 は、設問 1 と設問 4 を回答別に整理したものである。

(図 2)設問 1 の回答



(図 3)設問 4 の回答



#### (1)設問 1:エレベーターで階数ボタンを押してもらう

エレベーター内で階数ボタンが押せない場合、階数ボタンの前に立つ人に頼まざるを得ない。したがって、話し手が当該行為を要求する当然性は高い。加えて、当該行為は聞き手(階数ボタンの前にいる人)にしか頼むことができない。実際誰かに「階数ボタンを押してほしい」と頼まれれば、断る人は皆無だと思われるので、聞き手による当該行為の遂行はほぼ確実だと言えるだろう。

設問 1 は、年下・同世代・年上関係なく、すべての聞き手に対して<許可要求>系依頼表現が選択

されている(図2)。ただし、聞き手が年下・同世代の場合は〈許可要求〉系依頼表現が他の依頼表現に大差をつけているのに対し、聞き手が年上の場合は〈許可要求〉系依頼表現と〈可能要求〉系依頼表現が拮抗する結果となっている。聞き手が年下・同世代の場合は〈許可要求〉系依頼表現を使用する一方、年上の場合は〈可能要求〉系依頼表現を使用すると使用する回答した人が23名いた(20代:12名、30代:4名、50代:2名、60代:1名)。

### (3)設問4:バスで窓側に座っている人に窓を開けてもらう

設問4は、窓際に座っている人に対して窓を開けてほしいと頼むものであり、設問1と同様に、聞き手(窓際に座っている相手)にしか頼めないものである。ただし、設問1と違って、話し手が車内の暑さを我慢することもできる。したがって、状況による当然性は高いとは言えない。設問1と設問4を比較すると、状況による当然性の違いが〈許可要求〉系依頼表現の選択に影響することが分かる。

なお、設問4では聞き手が同世代の場合と、年下・年上の場合とでFTA度に大きな差が生じている。これは、設問1～設問4は聞き手を知らない人(=疎遠な人)と設定していたのに対し、設問4の同世代を想定した質問で聞き手を「隣にいる友人」と表記してしまったためである。表5から分かる通り、設問1から設問4において、〈許可要求〉系依頼表現の回答が最も多くなっているのは、聞き手が同世代の場合の設問4である。このことから、FTA度が低くなると〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすくなることが分かる。

### (5)まとめ(設問1～4)

設問1から設問4までで、聞き手に関係なく〈許可要求〉系依頼表現の回答が多くなったのは設問1のみであった。設問1は依頼内容の負荷度が小さい(=FTA度が低い)だけでなく、聞き手以外に当該行為を遂行する存在がない。加えて、エレベーターにいるという状況から、話し手が聞き手に「ボタンを押してほしい」と依頼する当然性も高くなっている。いわば、依頼内容の実現がほぼ確実なものである。

依頼内容の実現がほぼ確実なのは、設問4(聞き手が同世代の友人の場合)も同様である。聞き手が友人となれば、話し手が依頼する当然性が高くなる。さらに聞き手以外に窓を開けてほしいと頼める相手もいないので、設問1と同様に依頼内容の実現はほぼ確実なものとなる。そのため、設問4の聞き手が同世代の場合には、〈許可要求〉系依頼表現の回答が8割近くに達したのだろう。

しかし、バスの隣が見知らぬ人だった場合、依頼をせずに暑さを我慢するという選択肢に入れる人もいだろう。設問4は、「窓を開けてもらう」という行為の負荷度は小さくても、設問1と比較すると当然性が多少低くなる。現に、聞き手が年下の場合の設問1と設問4を見ると、設問4で〈許可要求〉系依頼表現の回答が減少している。しかし、〈許可要求〉系依頼表現が〈可能要求〉系依頼表現を上回ったのは、上下関係(P要因)が発生しないためにFTA度が低くなっていることが考えられる。



設問 2・3 の聞き手が年下の場合も、上下関係(P 要因)は発生しない。それにも関わらず、〈許可要求〉系依頼表現の割合が全体の 6 割に留まったのは、設問 4 とは異なり、聞き手以外にも当該行為を遂行できる存在がいるという点が影響していると推測される。

全体を通して、聞き手が年上になると、〈許可要求〉系依頼表現ではなく〈可能要求〉系依頼表現を選択する傾向が見られた。本アンケートの回答者は 20・30 代が多いことから、若者の中では上下関係に配慮しようという意識が働いていると言える。

### 3. アンケート結果(設問 5～9:FTA 度が高い依頼)

設問 5～9 は、FTA 度が高い依頼である。そのため、聞き手に当該行為の遂行を断られる可能性が高く、〈許可要求〉系依頼表現の使用が避けられるものと推測される。そこで、設問 5「お金を借りる」と設問 8「予定を変更してもらう」では、話し手が依頼する当然性が高まる状況を与えた。表 6 に、設問 5～9 までの個々の状況をまとめている。

(表 6)

	依頼内容の負荷度	状況による 当然性	聞き手以外の 存在の有無	人間関係の 継続
設問 5	大きい	高い	無し	有り
設問 6	大きい	低い	有り	有り
設問 7	やや大きい	低い	無し	有り
設問 8	やや大きい	高い	無し	有り
設問 9	大きい	低い	有り	有り

(表 7) 〈許可要求〉系依頼表現の選択率

	年下	同世代	年上
設問 5	58%	58%	27%
設問 6	34%	31%	19%
設問 7	36%	38%	22%
設問 8	65%	69%	34%
設問 9	38%	36%	19%

表 7 は、設問 5～9 における〈許可要求〉系依頼表現の使用状況を整理したものである。設問 1～5 と同様に、〈許可要求〉系依頼表現の割合が高いものは、網掛けで表示している。表 5 と比べると、〈許

可要求〉系依頼表現の使用が避けられていることが分かる。

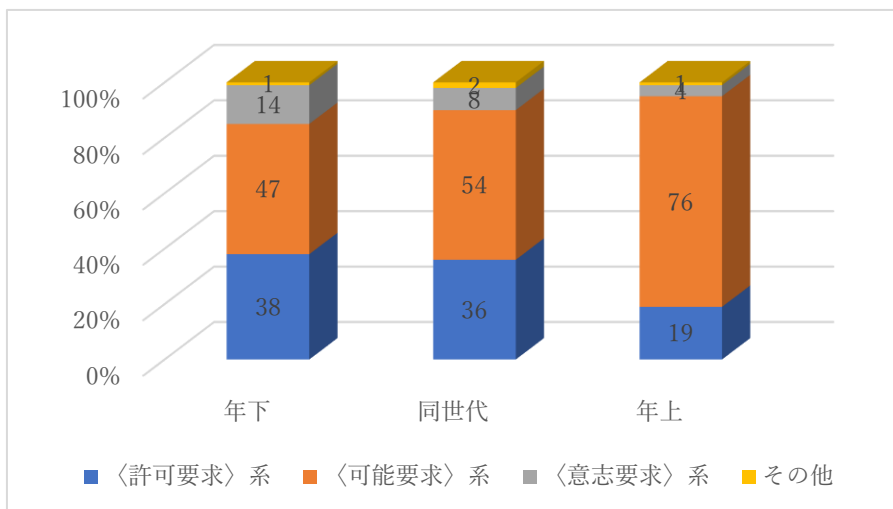
設問5と8では、聞き手が年下・同世代の場合に、〈許可要求〉系依頼表現の使用が多くなっている。これは、「バスで運賃を払おうとした際に、お金が足りないことに気付く」「話し手と聞き手は以前から会う約束をしている」という状況から、他の設問と比べて、話し手が依頼する当然性が高まったためだと考えられる。それに対して、聞き手が年上の場合には〈許可要求〉系依頼表現の使用が減少している。これは、設問1～4にも見られた傾向である。上下関係(P要因)に配慮した結果だと言える。

設問6・7・9は、聞き手が年下・同世代の場合であっても、〈許可要求〉系依頼表現の使用は増えなかった。このことから、話し手と聞き手の親しさ(D要因)から依頼のFTA度が緩和されても、話し手が依頼する当然性が低ければ、〈許可要求〉系依頼表現の使用は避けられるということが言えるのではないだろうか。

#### (1)設問9:アルバイトのシフトを代わってもら

設問9は、清水(2013)の会話4をもとに設定したものである。「アルバイトのシフトを代わってもら」という依頼はFTA度が高く、聞き手による当該行為の遂行は期待されない。そのため、筆者の仮説では、〈許可要求〉系依頼表現が使用されにくい依頼である。アンケート結果は、図4の通りである。

(図4)設問9の回答



聞き手が年下・同世代どちらの場合も〈可能要求〉系依頼表現の回答が最も多くなっている。なお、〈許可要求〉系依頼表現も38%(45名)、36%(43名)と2番目に多い回答となっている。これは、話し

手と聞き手の関係を友人関係としていることが影響しているのだろう。

一方、聞き手が年上の場合は、〈可能要求〉系依頼表現〉〈許可要求〉系依頼表現〉〈意志要求〉系依頼表現〉その他の順で多くなっている。これは、聞き手が年下・同世代の場合と共通している。しかし、〈可能要求〉系依頼表現の回答は全体の約 8 割を占めており、設問 5～9 のなかでも高い数値となっている。

## (2) 聞き手が年上の場合の回答: 設問 5～9

表 11 は、聞き手が年上の場合の回答を抜粋して整理したものである。どれも〈可能要求〉系依頼表現の回答が最も多くなっている。

(表 11) 聞き手が年上の場合の回答

	〈許可要求〉系	〈可能要求〉系	〈意志要求〉系
設問 5	27%	64%	5%
設問 6	19%	68%	8%
設問 7	22%	71%	6%
設問 8	34%	63%	3%
設問 9	19%	76%	5%

## V. まとめ

本章では、アンケート調査から明らかになったことをもとに、〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすくなる条件を再定義する。それをふまえて、日本語教育におけるより適切な導入場面を提案する。

### 1. 〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすくなる条件(再定義)

#### (1) FTA 度が低い依頼

依頼内容の負荷度(R 要因)が小さく、話し手と聞き手が親しければ、FTA 度は低くなる。そうなれば、〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすくなるのが容易に推測できる。そのため、本アンケート調査では、見知らぬ人に対して R 要因が小さい依頼を行うもの(設問 1～4)を設定した。

結果、聞き手の上下関係に関わらず〈許可要求〉系依頼表現が最も多く使用されたのは、設問 1 のみであった。エレベーター内で階数ボタンを押せない場合は、階数ボタンの前にいる人に頼むのが当然だろう。したがって、設問 1 は FTA 度が低いだけでなく、話し手が当該行為を依頼する当然性も非常に高いものと言える。

砂川(2006)は「エレベーターで階数ボタンを押してもらう」という依頼について、非常に簡単な行為であることから、「断れば、変人と思なされる依頼」と評している。「断れば、変人と思なされる」

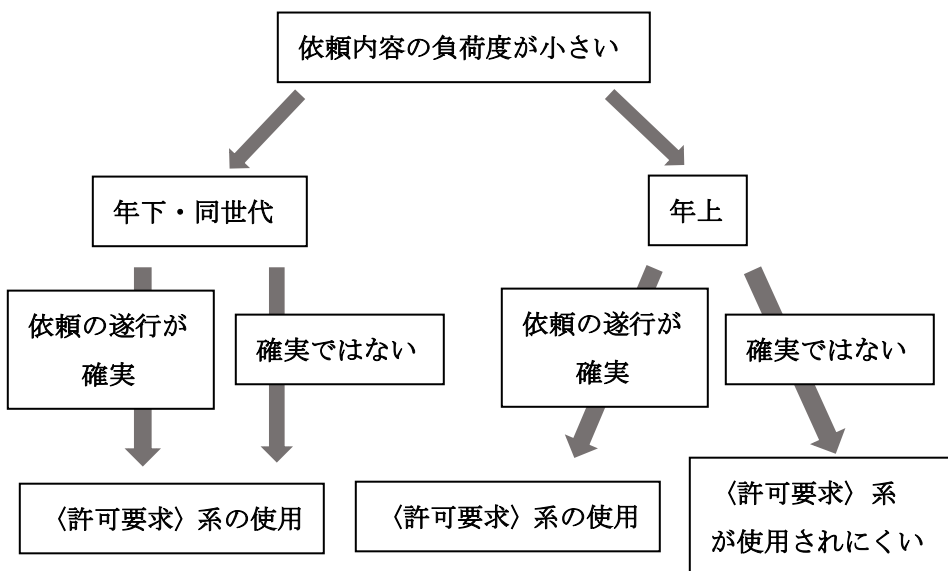
というのは、聞き手が当該行為を断った場合、聞き手のポジティブフェイスが侵害されるとみることができる。この「断りのFTA度」と「依頼のFTA度」を比べると、設問1の場合は断りのFTAの度合いのほうが大きいと推測される<sup>15</sup>。

このことから、設問1は「聞き手による当該行為の遂行が高く予想される依頼」ではなく、「聞き手が当該行為を遂行することが確実な依頼」と捉えることができる。設問1において、聞き手が年下・同世代・年上を問わず〈許可要求〉系依頼表現の使用が多くなったのは、話し手が「聞き手による当該行為の遂行が確実だ」と認識できる依頼だったためであろう。

設問2・3・4は、依頼内容の負荷度が小さいが、聞き手による当該行為の遂行が確実だと言えない依頼である。この場合、話し手と聞き手の上下関係によっては〈許可要求〉系依頼表現の使用が避けられることが分かった(IV章表5)。

上記をふまえて、〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすい条件として図5を定義する。

(図5)



\* 聞き手との親疎関係は考慮しない

## (2) FTA 度が高い依頼

本アンケート調査では、設問5と8において話し手が当該行為を依頼する当然性が高い状況を与えた。この2場面では、聞き手が年下・同世代の場合に〈許可要求〉系依頼表現の使用が多く見られた。したがって、話し手が当該行為を依頼する当然性が高ければ、FTA 度が高い依頼であっても、〈許可

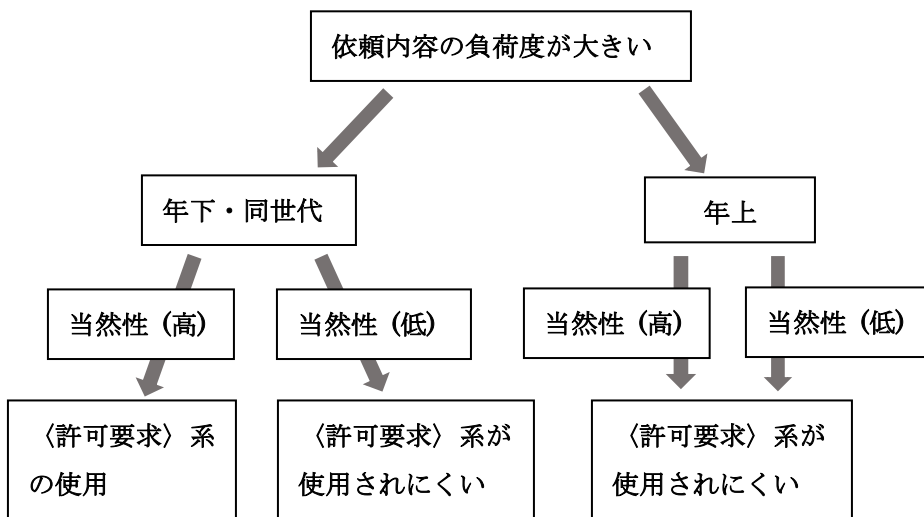
<sup>15</sup> 「エレベーターで階数ボタンを押す」という依頼内容の負荷度は非常に低いため、依頼のFTA度のほうが低くなると判断した。

要求〉系依頼表現は使用されやすくなると言える。

聞き手が年上の場合は、すべての設問で〈許可要求〉系依頼表現の回答が減少している。(1)FTA 度が低い依頼で、〈許可要求〉系依頼表現は聞き手が確実に依頼を遂行する場面で使用が顕著になることが分かった。このことから、話し手には「頼みを聞いてくれるよね？」のように、当該行為の遂行を聞き手に念押しする意図があると言えるのではないだろうか。もし、このような意図があれば、年上相手に念押しするような形で依頼をするのは失礼になるため、設問 5・8 においても〈許可要求〉系依頼表現の使用が避けられたと考えることができる<sup>16</sup>。

設問 5～9 で分かったことから、〈許可要求〉系依頼表現が使用されやすくなる条件を整理したものが図 6 である。

(図 6)



\* 聞き手との親疎関係は考慮しない

## 2. 日本語教育における〈許可要求〉系依頼表現の導入場面

清水(2013)は、〈許可要求〉系依頼表現を含む間接的な依頼表現を、(1)相手と上下の差が大きい場合(2)相手と疎遠な場合、また、(3)相手に依頼を引き受けてもらえる可能性が低い場合(4)相手にかかる負担が大きい場合に、用いる依頼表現としている。また、〈許可要求〉系依頼表現の使用場面として FTA 度が高いと推測される 2 場面を扱っている。

本稿で分かったことは、〈許可要求〉系依頼表現は FTA 度が低い依頼に対して使用される傾向にあることである。FTA 度が高くて、〈許可要求〉系依頼表現が使用されることはあるが、それには、話し手が依頼する当然性が高いことが必要になる。したがって、筆者は日本語教育における〈許可要求〉

<sup>16</sup> この仮説の適切性は、使用者の意識調査を行わなければ明らかにならない箇所である。

系依頼表現のより適切な導入場面として、FTA度が低い場면을提案する。

(導入例①)

**状況：**教室が暑いので、オワナは窓側の席に座っている友人のみきに声をかけます。

**オワナ：**みきちゃん！

**みき：**なに？

**オワナ：**ごめん、教室が暑くて我慢できないから、窓開けてもらっていい？

**みき：**わかった！

導入例①は、話し手(オワナ)が窓側の席に座っている聞き手(みき)に「窓を開けてほしい」と頼むものである。「窓を開ける」という依頼内容の負荷度が小さい。さらに、話し手と聞き手を友人としたことで、依頼のFTA度は非常に低くなっていると予想される。この場合、当該行為の遂行を断る聞き手はほとんどいないだろう。つまり、聞き手による当該行為の遂行が確実だと考えられる依頼となっている。

(導入例②)

**状況：**エレベーターが混雑していて、自分で階数ボタンが押せません。階数ボタンの前に立っている人に声をかけます。

**オワナ：**すみません、5階を押していただいてよろしいでしょうか？

**男性：**わかりました。

聞き手が年上の場合に〈許可要求〉系依頼表現が使用されるのは、FTA度が低く、さらに聞き手による当該行為の遂行が確実なものでなければならない。そのため、聞き手が年上の場合の使用例を作成するならば、「エレベーターで階数ボタンを押してもらおう」という依頼が最も適切であると考えられる。

本アンケート調査の設問9では、聞き手を問わず〈可能要求〉系依頼表現が最も多く選択された。したがって、清水(2013)の会話4は〈許可要求〉系依頼表現の使用場面として適切ではないと考えられる。筆者は以下の修正案を提案する。

**会話4 修正案①「話し手が当該行為を依頼する当然性が高いという状況を作る」**

**状況：**オワナはアルバイトのシフトが入っている日に、就活の面接が入ってしまった。そこで、以前「その日は何も予定が無い」と言っていた後輩のみきに、シフトの交代を頼む。

**会話4 修正案②「話し手と聞き手の関係を親しくする」**

状況：オワナはアルバイトのシフトが入っている日に、就活の面接が入ってしまった。そこで、且頃から連絡を取り合うほど仲が良い後輩のみきに、シフトの交代を頼む。

#### 会話 4 修正案③「聞き手以外に頼める人がいないことを明記する」

状況：オワナはアルバイトのシフトが入っている日に、就活の面接が入ってしまった。そこで、唯一のアルバイト仲間である後輩のみきに、シフトの交代を頼む。

## VII. おわりに

### 本稿のまとめと今後の展開

本稿は、近年依頼場面において多用される〈許可要求〉系依頼表現に注目し、この表現が使用されやすくなる条件を、FTA 度を中心に明らかにしたものである。さらに、それを日本語教育における導入に応用している。

〈許可要求〉系依頼表現は「聞き手による当該行為の遂行が高く予想される依頼」において使用されやすくなるとし、それを①FTA 度が低いために、聞き手による当該行為の遂行が高く予想されるもの、②FTA 度は高いが、話し手が当該行為の実行を依頼する当然性が高いために、聞き手による当該行為の遂行が高く予想されるものの 2 つに分けた。さらに当然性を左右する要因として「状況」、「話し手と聞き手の人間関係の継続」、「聞き手以外に依頼できる人の有無」の 3 つを挙げた。

この仮説を検証するため、日本語母語話者を対象にアンケート調査を実施している。仮説では、FTA 度が低ければ、〈許可要求〉系依頼表現は使用されやすくなるとした。しかし、FTA 度が低い依頼でも、聞き手が年上の場合は「話し手が当該行為を依頼する当然性の高さ」や「聞き手以外に当該行為の遂行を担える人物の有無」などから、聞き手による当該行為の実行が確実なものだと認識されなければ、使用が避けられることも明らかになった。

年上に対して使用が避けられるのは、FTA 度が高い依頼においても共通している。FTA 度が高い依頼では、聞き手が年下・同世代で、話し手が当該行為を依頼する当然性を高いことが、〈許可要求〉系依頼表現の使用に繋がることが分かった。

本稿では、〈許可要求〉系依頼表現の使用を左右する要因として「話し手が当該行為を依頼する当然性」を挙げた。これは、FTA の度合いだけでなく、様々な要因から影響を受けるものである。そのため、本稿では十分に扱いきれなかったものもある。今後も研究を続け、今回明らかにできなかった聞き手が年上に〈許可要求〉系依頼表現の使用が回避される原因などを追究し、さらに普遍性のある研究に考察を深化させていくことを今後の課題としたい。

## 参考文献

- 宇佐美まゆみ(2001)「談話のポライトネス：ポライトネスの談話理論構想」『談話のポライトネス』  
第7回国立国語研究所国際シンポジウム 国立国語研究所、pp.9-58
- 宇佐美まゆみ(2008)「ポライトネス理論研究のフロンティア：ポライトネス理論研究の課題とディス  
コースポライトネス」『社会言語学』(11)、pp.4-22
- 岡本真一郎(2000)『言語表現の状況的使い分けに関する社会心理学的研究』風間書房
- 蒲谷 宏(2007)『『丁寧さ』の原理に基づく『許可求め型表現』に関する考察』『国語学研究と資料』  
(30)、pp.37-46
- 川口義一・蒲谷 宏・坂本 恵(2002)『『敬語表現』と『ポライトネス』：日本語研究の立場から』『社  
会言語学』(5)、pp.21-27
- 清水崇文編著(2013)『中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話』スリーエーネットワーク
- 砂川有里子(2006)『『～てもらっていいですか』という言い方：指示・依頼と許可求めの言語行為』  
『言外と言内の交流分野：小泉保博士傘寿記念論文集』、pp.311-321
- 戸嶋裕介・皆川直凡(2008)「依頼コストと依頼の相手による依頼表現の変動」『計量国語学』(28)、  
pp.158-164
- 山岡政紀(2008)『発話機能論』くろしお出版
- 山岡政紀・牧原 功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現』明治書院
- Brown, P and S. Levinson(1987) Politeness: Some universals in language usage, Cambridge  
University Press